

品詞と意味における二重誤用されやすい日中同形語 に関する研究

王, 燦娟

<http://hdl.handle.net/2324/1398378>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 王 燦娟
論文題名 : 品詞と意味における二重誤用されやすい日中同形語に関する研究
区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

これまでの日中同形語に関する先行研究は大凡、概説的、総合的な研究と誤用研究に2分類できる。これらの研究については主に以下の2つの問題点が指摘できる。

- ①日中同形語に対する分類基準には厳密さが欠けており、加えて意味と品詞を引き離して分類を行っており、意味と品詞を結びつけた二重分類基準はほとんど見られない。
- ②意味の誤用と品詞の誤用を切り離して考えており、その片方だけに偏った研究が多い。品詞と意味の二重誤用がされやすい日中同形語（例：唱歌、低落）に関する研究はあまりなされていないようである。

従って、本研究では主に以下の三点を目的としている。

第一に、先行研究の日中同形語の分類方法を改善し、より合理的で、厳密な分類方法を導き出すことを試みる。第二に、二重誤用されやすい日中同形語(二字同形語のみ)にはいかなる語があるのか、という点を明らかにし、それに基づきこれらの語の中国人日本語学習者における誤用実態、特に誤用傾向を把握する。第三に、誤用の原因を究明し、日本語教育の視点から誤用防止策を立案する。

研究方法として、まず先行研究の問題点を検討し、その日中同形語に対する分類方法を改善し、二重分類法を確立する。次に、二重誤用されやすい二字同形語にはいかなる語があるのかを究明するために、文献調査を実施し、二重誤用されやすいと推定した二字同形語を抽出する。それから、文献調査で抽出した同形語の中からあまり使用しない語を取り除くために、第一次使用状況調査を実施し、日本語母語話者がよく使用する語を抽出する。また、日本語母語話者がよく使用する日中同形語の、中国人日本語学習者における誤用の実態、特に誤用の傾向を把握するために、誤用状況調査を行う。調査は二重誤用文を作成し、協力者(中国の大学に在学する2年~4年の日本語専攻生)に正誤判断を行ってもらう形式で実施する。また、誤用が生じる原因は母語干渉であるが、母語干渉の強弱は中国語母語話者における日中同形語の使用状況と日本語テキストにおける日中同形語の出現頻度の影響を受けると推定しているので、それを検証するために、第二次使用状況調査(中国語母語話者における日中同形語使用状況調査)と『新編日語(修訂版)』という日本語テキストにおける日中同形語の出現頻度調査を実施する。

研究の結論として、以下のことが分かった。

まず、先行研究の意味に偏った分類基準を改善し、「意味+品詞」の組み合わせによる二重分類法を確立した。その分類法により、日中同形語を「意同品同型、意同品重型、意同品異型、意重品同型、意重品重型、意重品異型、意異品同型、意異品重型、意異品異型」という9種類に分類できた。また、その中の「意重品重型、意重品異型、意異品重型、意異品異型」という4種類、すなわち二重誤用が生じる可能性がある語を更に「意含品含型、意含品交型、意交品含型、意交品交型、意含品異型、意交品異型、意異品含型、意異品交型、意異品異型」という9種類に分けられた。

次に、文献調査により、二重誤用が生じる可能性がある日中同形語を114語抽出した。また、第一次使用状況調査により、日本語母語話者がよく使用する同形語を52語抽出した。それから、この52語の誤用状況を調査した結果、誤答率が正答率より高い語は20語あり、平均誤答率が最も高い3種類は意交品含型(41%)、意含品交型(36%)と意含品含(34%)であった。更に、学年平均の実質誤答率を集計した結果、「2年生53%、3年生37%、4年生43%」であった。また、3年生の実質平均誤答率が4年生より低い原因は「①個別大学の影響、②個別語の影響、③日本語専攻の科目設定及び使用テキストの影響」であることが分かった。全体的

に見れば、高学年の3年生、4年生でも実質平均誤答率が40%前後であったので、ある程度調査対象語が二重誤用されやすいことが論証された。

次に、第二次使用状況調査を行った結果、調査対象語の52語はすべて中国人母語話者があまり使用しない語であることが分かった。また、この52語の『新編日語（修訂版）』における出現頻度を調査した結果、出現頻度の高い語は「勉強、上手、丈夫、用心、結構、記事」という6語であり、残りの46語はすべて出現頻度の低い語であった。

上記の各調査で把握した誤答率、出現頻度と中国語母語話者の使用状況を結び付けて分析した結果、以下のことが明らかになった。

あまり使用しない語は母語干渉の影響が弱いので、出現頻度が低くても誤用される可能性は比較的低い。特に出現頻度が高い場合、誤用される可能性はより一層低くなる。

もちろん、二重誤用の原因は母語干渉だけではない。より厳密に言うと、意味と品詞の両方に重ならない部分があることは二重誤用が生じる可能性があるということを示唆し、母語干渉は必然的に誤用を生じさせるものである。この可能性と必然性により意味、形態、統語の誤用が生じると、品詞の誤用も連動して生じてしまう。

最後に、誤用防止策として、日本語教師側による日本語テキストの改善と日本語教授法の改善、中国人日本語学習者側による日本語学習方法の改善及び日本語教育研究者側による誤用防止データベースの構築等が非常に重要であると考えられる。